

聖金曜日（主の受難）

ヨハネ 18・1～19・42

2018.3.30

高円寺教会 19:00

うめざき たかいち  
クラレチアン宣教会 梅崎 隆一神父

香部屋の中で動き回っている小学校3年生の侍者を見た司祭が、その子どもを捕まえて長々と説教した。一緒に侍者をするために香部屋にいた大学生もそれを聞く羽目になった。長い内容を要約すると、「こんなことをして親の言うことも聞かなかつたら、人殺しとかする人間になってしまいますよ」、「これから私はあなたを人殺しとかそういう人間にならないようにちゃんと見張ってますからね!!!」という内容だったそうです。大学の兄ちゃんは、「論理的飛躍が過ぎるのではないか…」と感じたそうです。しかし熱くなっている司祭に「言っていることはおかしいのではないですか」と言ったらどんな目にあわされるか分からないので、静かにしていたそうです。

しばらくすると今度は典礼委員長がやってきて、小学生の侍者に向かって、「あんたは何もする必要はない。とにかく居眠りとかしたらひきずりおろすからな」と言って香部屋から出て行きました。

やがて、ミサが始まると何事もなかったかのように皆で手を合わせている風景を眺めながら、大学の兄ちゃんは「(お笑いの) コントみたいだ」と思ったそうです。そして「教会って変なところだ」と感じたそうです。

子どもに対して取った大人たちの態度は児童虐待に当たる行為なのですが、加害者にしてみれば正しい信念によって行ったと自負していることでしょう。日常の精神的暴力は、大きなことであっても小さなことであっても構造的に同じであると感じます。

今日、わたしたちは受難劇の朗読を通してイエス・キリストの受難に接しています。イエスに向かって暴力を行った力というのは、政治的なものもあれば軍事的なものもあり、それから宗教っていう部分もあった。あらゆる権力がイエスを殺そうとしているときに、ペトロは自分の力でイエスを守ろうとして剣を振り上げました。おそらく彼は自分の熱心さを示すため、また一番弟子のプライドをもって自分の理念を押し通すために人を傷つけようとした。しかし、むしろそれはイエスの働きを妨げることになりました。イエスが暴力に対して暴力で対抗するのであれば、彼は単なるこの世の権力者でし

かななかったこととなります。しかし、イエスは非暴力というのを貫くことで、権力に押さえられているすべての人のとるべき姿の模範となりました。

世界や社会の中だけでなく、小さい教会の香部屋の中でもそういったことがあり、小さな心が傷つけられたりすることもあります。しかし、暴力に屈することなく、また侍者の務めを放棄することなく、神を讃えた小さい勇気がイエスの受難とは何かということをよく示していると思います。